

本田 実氏が吉川英治文化賞を受賞

財団法人・吉川英治国民文化振興会が、日本文化の向上につくした個人、あるいは団体に贈呈している吉川英治文化賞の第19回受賞者が発表された。受賞者は4人の個人と1個体で、個人受賞者の1人として倉敷の本田実氏が選ばれた。受賞式は4月11日に東京の帝国ホテルで多数の関係者が出席しておこなわれた。本田氏については、ここで改めて紹介するまでのことはないが、同氏の長年にわたる彗星や新星の搜索への努力と、この方面へ後輩の進出をうながすための先駆者として日本の天文界特に新彗星と新星の発見に寄与された業績が、高く評価され、たたえられたものである。

1960年代になると日本の彗星搜索界にも、関勉氏や池谷薫氏をはじめとして、多数の搜索家が輩出し、「彗星王国・日本」とまでいわれるようになったが、それまでの新彗星の発見は、本田氏の一人舞台であった。そして、現在までに新彗星の発見は12個に達し、その総べてが眼視による搜索の結果である。

次に、本田氏の発見した新星の第1号は、1970年2月の“へび座新星= FH Ser”であり、戦後に日本人が発見した第1号でもある。この新星以来、現在までにすでに10個の新星を発見されているが、1975年の白鳥座新星= V 1500 Cyg 以外は、すべて写真による発見で、この点が彗星の場合と大きく事情が変わっている。

1960年ごろ、東京天文台は人工衛星の測地利用として、全国に何箇所かの写真観測点を設定し、1年に何回かのプログラムを実行していた。その写真観測を、本田氏にもお願いして協力を仰いでいた。また、内外から寄せられる新天体に関する情報の、写真による確認にも力添えをお願いし、その結果は東京天文台の出版物にも公表されてきた。本田氏は、この写真儀に小型カメラを同架し、多数の星野写真を得た。この原板が新星搜索のきっかけとなったわけである。東京天文台へは年に10通を超える照会の写真が本田氏から送られて来る。そして、その写真に添えられた手紙には「星を楽しんでいると、このようなことに出合います。恐縮ですがお調べ



下さい」と書いてある。

岡山県倉敷の街も、最近の都市化の影響を強く受け、星を見る環境からは、ほど遠くなってしまった。彗星のように淡い拡がった天体の搜索は絶望的だそうである。

本田氏は、昼間は保育園の園長先生である。夜は倉敷天文台の台長であり、また、たった1人の職員でもある。

光害の倉敷市内を逃がれて、車による移動観測が長い間続いたが、最近は車で北へ1時間程離れた山頂に観測所を建設し、夜毎に星空との語らいを楽しんでいる。観測所内には多くの機材が備えられ、多い時には9台のカメラが同時に星空を写し込んでいる。それらは必ず2台がペアを組んで、星像の誤認を防いでいる。新星の搜索を主な目的とした星座との対面が、写真によっておこなわれているのである。写した原板は、翌日には検査されて、前述のような照会の手紙となっている。

日本天文学会が贈る「天体発見賞」の最多受賞者でもある本田氏の今回の受賞を、共に慶びたいものである。

なお、天文関係者としては今までに、水沢・緯度観測所の故・平三郎氏と、滋賀県の本辺成磨氏が、この賞を受賞しておられる。
(香西洋樹)

雑報

NGC 3675 銀河の超新星

静岡県舞坂町の池谷 薫氏は、1984年12月2日19時50分(UT)に、25cm 反射望遠鏡に50倍、180倍、230倍の倍率を使用して、NGC 3675 銀河の中心核から北西へ約10秒角離れた場所に13等級の超新星と思われる像を眼視で検出し、東京天文台へ連絡して来られた。東京

天文台堂平観測所の50cm シュミット望遠鏡で直接写真が1984年12月4日UTに、柴崎 肇氏によって撮影され、位置が測定された。

$$\alpha = 11^{\text{h}}23^{\text{m}}23^{\text{s}}.82 \quad \delta = +43^{\circ}51'36''.2 \quad (1950.0)$$

その後も池谷氏により、1984年12月2.826日から8.819日(UT)まで眼視観測が続けられた。しかし、この頃は大望遠鏡が対応できる状況になかった様子で、残念ながらスペクトルが得られた、という情報はない。

(香西洋樹)